『楚辞章句』引書考

宮野直也

はじめに

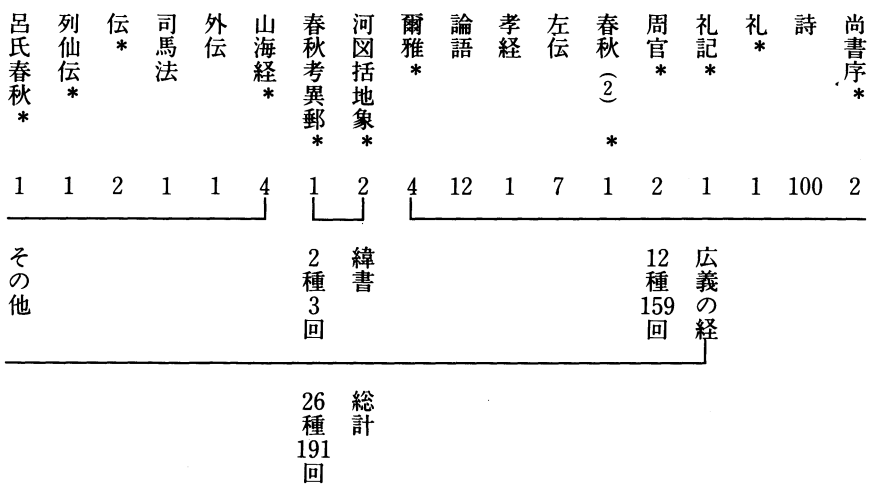
現存最古の楚辞の注釈書である後漢の王逸の『楚辞章句』の注釈中には、百九十一箇処に及ぶ書名を明示した引用が含まれている。『楚辞章句』の成立は後漢の中期であるので、これらの引用は文献学上の資料として少なからぬ価値を有する。のみならず、これらの引用を検討することによって、王逸本人及び『楚辞章句』に対して、新たな角度から光を当てることもできるのである。

本論文は、『楚辞章句』の注釈から全ての引用文を抽出して「楚辞章句引書表」(1)を作製して付載するとともに、それに基づいて王逸の注釈の性格の考察を試みるものである。

一

『楚辞章句』の注釈中に引用された書名とそれぞれの引用された回数は以下の通りである。

易　12
尚書　16


尚書序*
2
詩
100
礼*
1
礼記*
1
周官*
2
春秋(2)*
1
左伝
7
孝経
1
論語
12
爾雅*
4
河図括地象*
2
春秋考異郵*
1
山海経*
4
外伝
1
司馬法
1
伝*
2
列仙伝*
1
呂氏春秋*
1
広義の経
12種
159回
緯書
2種
3回
その他
総計
26種
191回

孟子＊	1
帝繫＊	4
相玉書＊	1
禹大伝＊	1
淮南子＊	11
陵陽子明経＊	1
12種29回	

経及び経に準ずる書物は、『漢書』芸文志・六芸略の順序に従って排列し、その後に緯書を付した。その他の書物は、書名の第一字の筆画順に並べた。

一見して気付くのは、『詩経』の引用回数が百回、全体の五十二％と圧倒的に多いことである。それ以外で多いものとしては、『易経』の十二回、『書経』の十六回、『論語』の十二回、『春秋左氏伝』の七回、『淮南子』の十一回があるが、いずれも『詩経』には遠く及ばない。引用回数の多い書物は、『淮南子』以外は経に属することにも留意すべきである。全体的に見ても、一九一回の引用中一五九回、約八十三％が広義の経で占められている。

王逸は『詩経』をかくも多量に引用しており、しかも篇末の引詩表を見ればわかるように、引用箇処は『詩経』全体に亙っている。ということは、少なくとも王逸が詩経学に精通していたということは立証し得たと思われる。

『詩経』の引用数が突出しているという事実に関して今一つ想起されるのは、以下の二箇処での王逸の言明である。

而屈原履忠被譖、憂悲愁思、独依詩人之義而作「離騒」、上以諷諫、下以自慰。

（『楚辞章句』序）

「離騒」之文、依『詩』取興、引類譬諭。故善鳥香草、以配忠貞、悪禽臭物、以比讒佞、靈脩美人、以媲於君、宓妃佚女、以譬賢臣、虬竜鸞鳳、以託君子、飄風雲霓、以為小人。其詞温而雅、其義皎而朗。

（「離騒経章句」序）

屈原は「詩人」即ち『詩経』の作者達の義に依って「離騒」を作り、「離騒」の比喩表現は『詩経』の「興」に依ったものである、換言すれば「離騒」は『詩経』と同一の原理に基づいて作られており、従って『詩経』と同等の存在である、と王逸は主張しているのである。このような王逸の見解と、『楚辞章句』の注釈中における『詩経』からの大量の引用とは、当然密接に関連していると予想される。

二

以下、王逸の注釈中における引用がどのような機能を有しているかを検討し、その分類を試みる。

私の見る所では、『楚辞章句』の注釈中における引用は、大きく四つの類型に分けられる。もとより、箇々の例については、どの類型に属するか決定し難い場合も少なくないのではあるが。

まず、最も多いのは、楚辞作品の本文に登場する人名、地名、故事、その他の物事に関する事典的乃至は辞典的説明、またはそのような説明の根拠となる用例、としての引用である。これをA類とする。この類型は甚だ明白であるので、ここでは実例を挙げない。篇末の引書表を参照されたい。

前節で列挙した書名の下に＊がついているものは、その書物からの引用が全てA類に属していると認められる。つまり『楚辞章句』に引用された二十六種の書物の中で十八種までがA類としてのみ引用されている。特に経以外の書物では、『外伝』・『司馬法』各一箇処の引用以外は全てA類に属しているのである。経以外では唯一『淮南子』から

の引用数が目立ったのも、それらがA類であり、『淮南子』には楚辞と対応する神話伝説に関する記事が多いことで納得し得る。

次に狭義の典故表現、即ち楚辞本文のある字句が、字義通り乃至は文脈上からの意味だけではなく、その字句の出典の内容をも荷ったものとして使われていること、の指摘としての引用がある。これをB類とする。但し典故表現には、出典の内容とは無関係に、表現のみを借用するものもあり、これらもB類に入れねばならない。従ってB類に属する引用か、それとも単なる用例の指摘なのか決定し難い例もある。以下に明白な例を挙げる

。余固知謇謇之為患

注：謇謇、忠貞貌也。『易』曰「王臣謇謇、匪躬之故。」㊷(3)

。若青蠅之偽質兮

注：青蠅変白使黒、変黒成白、以喩讒佞。『詩』云「営営青蠅。」⑯⑦

B類に属すると明白に認められる例は極少数である。

以上の二類型においては、原則として楚辞本文と注釈中の引用文との間に、字句の上での明白な対応が存在しているのは言うまでもない。また、通常の注釈における必然性のある引用、換言すれば本文の意味を明らかにするために有益な引用は、ほとんどがA類とB類とに収まるであろう。

ところが、これら以外に更に二つの類型が認められるのである。

まず、少数ではあるが、楚辞本文と注釈中の引用文が字句の上では全く一致せず、内容上のみで対応するものがある。これをC類とする。

。畎歳発春兮　汨吾南征　菉蘋斉葉兮　白芷生

注：言、屈原放時、菉蘋之草其葉適斉、白芷萌芽、方始欲生。拠時所見、自傷哀也。猶『詩』云「昔我往矣、楊柳依依」也。⑬

。苟余心其端直兮　雖僻遠之何傷

注：言、我惟行正直之心、雖在遠僻之域、猶有善称、無害疾也。故『論語』曰「子欲居九夷」也。㉓

C類に属すると認められる例も少数である。

更に『詩経』からの引用を中心に、一見して引用の必然性が了解し難い例が少なからず存在するのである。即ち楚辞本文と注釈中の引用文との表現上の一致は一文字のみであり、内容から見てもA類B類とも見なし難い例である。(4)

これをD類とする。

。躬劬労而瘠悴

注：瘠、病也、『詩』云「我馬瘠矣。」⑭

。砥室翠翹

注：砥、石名也。『詩』曰「其平如砥。」⑲

。循繩墨而不頗

注：頗、傾也。『易』曰「無平不頗」也。㊹

。曁志介而不忘

注：曁、与也。『尚書』曰「讓于稷契曁皐陶。」㉙

。吸精粹而吐氛濁兮

注：氛、悪気也、『左氏伝』曰「楚氛甚悪。」⑬

。蓍蔡兮踊躍

注：蔡、大亀也。『論語』曰「臧文仲居蔡。」⑯

D類に属すると認められる引用は、ここで例を挙げた『詩経』・『易経』・『書経』・『春秋左氏伝』・『論語』からの引用のみである。回数は大変多く、殊に『詩経』からの引用の大部分はD類に属すると認められる。篇末のII表を参照されたい。これらは一般に、最初に本文中の一文字に対する訓詁を施し、その後にその文字を含む引用文を挙げている。従ってこれらの引用は、用例であると考えざるを得ない。

ということはA類とD類とをいかに区別するかという難題がもちあがることになる。何故ならD類とA類との差異は、訓詁の後に挙げられている引用文の用例としての存在意義の有無のみであるのだから。

しかしながら、経以外の書物からの引用で、A類かD類か区別し難い例は皆無であるから、この件は本論文においては問題にならないと考えられる。更に『楚辞章句』の注釈全体を見ると、用例を伴わない訓詁が大量に存在している。

それでは、C類・D類の引用は、王逸のどのような意図に基づいてなされたのであろうか。

三

王逸の注釈には二十六種の書物が引用されているが、C類・D類に属する引用の対象となっているのは八種のみである。即ち『詩経』、『書経』、『易経』、『春秋左氏伝』、『孝経』、『論語』、『司馬法』、『外伝』である。

これらは、C類の引用各一回のみの『司馬法』、『外伝』以外は、全て経に属している。更にC類の引用一回の『孝

経』を除けば、第一節で指摘した特に引用回数の多い書物に集中している。逆に考えれば、これら五種の書物からの引用数が多いのは、C類・D類の引用があるためと考えられる。

以上の事実に留意した上で、まず本文と注釈中の引用文との関係について一般的な考察を行なう。

B類においては、本文は典故である引用書に依拠して書かれているのは言うまでもない。A類においても、本文中で言及される事物の多くは引用された書物によって作者の知る所となったはずであるから、これまた本文は引用書に依存していると考えてよいであろう。つまりA類・B類の引用書と本文との関係は上下関係と考えられる。

一方C類は本文と引用文との内容上の対応、D類は本文と引用文との表現上の対応を示していると考えられる。しかしC類における本文と引用文との対応の実態は、具体的な内容を捨象した一般的な水準での一致のみである。またD類での本文との引用文との関係は、典故でもなく、本文に対する訓詁の根拠として有意義であるわけでもない。従ってC類・D類においては、本文と引用書とは、対応してはいるが、依存関係にはない。つまり同列の存在であると考えられるのである。そして、このC類・D類の引用は、本文の意味を明らかにするという注釈本来の機能は甚だ微弱である。

このようなC類・D類の性格と、本節の初めに述べたように、C類・D類に属する引用は、引用回数が突出して多い『詩経』と経に属して引用回数の比較的多い書物からのものがほとんどであること、更に第一節で指摘したように、王逸は『楚辞章句』序及び「離騒経章句」序で重ねて「離騒」が『詩経』と対等な存在であると主張していること、を考え併せると、C類・D類の引用は、「離騒」が『詩経』と同等な経であるという王逸の主張の根拠として挙げられているのではないだろうか。

四

前節末において提出した仮説は、王逸自身の発言によって部分的ながら裏付けすることができる。

王逸『楚辞章句』序に云う。

夫「離騒」之文、依託五経以立義焉。

a「帝高陽之苗裔」、則「厥初生民、時惟姜嫄」也。

b「紉秋蘭以為佩」、則「将翺将翔、佩玉瓊琚」也。

c「夕攬洲之宿莽」、則『易』「潜竜勿用」也。

d「駟玉虬而乗鷖」、則「時乗六竜以御天」也。

e「就重華而陳詞」、則『尚書』咎繇之謀謨也。

f「発崑崙而涉流沙」、則「禹貢」之敷土也。

この文章は、後漢の班固がその「離騒」序において、「離騒」について「謂之兼『詩』風・雅、而与日月争光、過矣！」つまり『詩経』と同等ではない、と論拠を挙げつつ断定したのに対して、王逸が逐条的に反駁を加えた件りの一部である。班固の「離騒」序において、「離騒」の内容が「多称崑崙・冥婚宓妃虚無之語、皆非法度之政、経義所載」と論じた部分に対応している。(6)

ということは、王逸のこの文章は「離騒」の内容が「法度之政、経義所載」であることを論証するものであるのみならず、「離騒」が「兼『詩』風・雅、而与日月争光」つまり『詩経』と同等の経である、という主張の論拠でもある。

それでは王逸が挙げた「離騒」と経との対応の例a～fを検討する。

aで挙げられているのは『詩経』大雅・生民、bでは『詩経』鄭風・有女同車、cでは『易経』の乾の初九、dでは同じく乾の彖伝、eでは『書経』皐陶謨、fでは『書経』禹貢である。正に『楚辞章句』の注釈中において引用回数が多い書物である。更にこれらは、『楚辞章句』の注釈中に引用された書物の中では数少ない、C類・D類の引用が行われた書物でもある。

そして、ここに挙げられた「離騒」の句と経との関係は、一見して明らかにC類のそれと同一である。

以上によれば、注釈中における経からのC類の引用、換言すれば楚辞本文と経との同列の対応の提示、は本文と引用された経との同等性を根拠づけ得ると王逸は考えていたのである。

最後に一つ論ずべきことが残っている。

王逸は、「離騒」は『詩経』と同等な経であると主張しており、それ以外の『楚辞章句』所収の楚辞作品は「離騒」経の伝であると考えていた。[7] ところが、楚辞本文と経との同等性を示すはずのC類・D類の引用が、実は「離騒」の注釈中だけでなく『楚辞章句』全体に分布している。これは一見して小さからぬ矛盾のように思われるであろう。

しかしながら、伝とは経を明らかにするものである以上、経と伝とは内容的に一致していると見なされており、その結果、伝を経と同列に扱う例は『易』の十翼、『春秋』の三伝を初めとして珍しいものではないのである。

『楚辞章句』引書表

一、この表は、四部備要本『楚辞補注』を底本とした。

一、この表は、『詩経』以外の引用書を輯録したI『楚辞章句』引群書表と、『詩経』の引用を抽出したII『楚辞章

句』引詩表とからなる。

一、I表は、王逸の挙げた書名の、常用漢字による筆画順に排列した。同一書が複数ある場合は、その引用の『楚辞章句』中での位置の順に排列した。但し現行本に見られない引用は、その書物の最後に付した。

一、II表は、引用文の『毛詩』中での位置の順に排列した。但し現行『毛詩』の中に対応する詩句が見出せない場合は、最後に付した。

一、表の体裁は以下の通りである。

各項目は原則として二行からなる。一行目には、I、II表を通じての通し番号をつけ、注の対象となった楚辞の本文を挙げ、最後に注の位置を四部備要本の巻数・葉数の数字と表裏を示すａｂとで表示した。

二行目には注釈中から抽出した引用及び必要に応じてその前後の注釈を挙げ、その後にその引用の現行本での位置を可能な範囲で表示した。

I 『楚辞章句』引群書表

山海経

1 一蛇呑象 厥大何如 3・9a
山海経云南方有霊蛇呑象三年然後出其骨（海内南経）

2 仍羽人於丹丘兮 5・5a
山海経言有羽人国不死之民（大荒南経、海外南経）

3 絶都広以直指兮 16・28b
山海経曰都広在西南其城方三百里蓋天地之中也（海内経）

4 駟玉虬以乘鷖兮 1・20a
山海経云鷖身有五采而文如鳳

外伝

5 各興心而嫉妒 1・9b
謂与己不同則各生嫉妒之心推弃清潔使不得用也故外伝曰太山之鴟鳴嚇鴛雛此之謂也（荘子・秋水）

司馬法

6 偃王行其仁義兮 荊文寤而徐亡 13・4a
故司馬法曰国雖強大忘戦必危蓋謂此也（仁本）

左氏伝

7 啓九弁与九歌兮 1・16b
左氏伝曰六府三事謂之九功九功之徳皆可歌也謂之九歌水火金木土穀謂之六府正徳利用厚生謂之三事（文公七年）

8 羿淫遊以佚畋兮……厥首用夫顚隕 1・17b
自此以上羿澆寒浞事皆見於左氏伝（襄公四年）

9 吾使厲神占之兮 4・4b
厲神蓋殤鬼也左伝曰晋候夢大厲搏膺而踊也（成公十年）

10 豔陸離些 9・11a
豔好貌也左氏伝曰宋華督見孔父之妻目逆而送之曰美而豔（桓公元年）

11 与王趨夢兮課後先 9・14b
夢沢中也楚人名沢中為夢中左氏伝曰楚大夫鬬伯比与郧公之女淫而生子弃諸夢中（宣公四年）

12 伊伯庸之末胄兮 16・2a
胄後也左氏伝曰戎子駒支四岳之裔胄也（襄公十四年）

13 吸精粹而吐氛濁兮 16・2a
氛悪気也左氏伝曰楚氛甚悪（襄公二十七年）

礼

14 字余曰靈均 1・4a
礼曰子生三月父親名之既冠而字之

礼記

15 何獣能言 3・8a
礼記曰猩猩能言不離禽獣也（曲礼）

伝

16 胡躲夫河伯 3・11b
伝曰河伯化為白竜遊于水旁羿見躲之眇其左目河伯上訴天帝曰為我殺羿天帝曰爾何故得見躲河伯曰我時化為白竜出遊天帝曰使汝深守神霊羿何従得犯汝今為虫獣当為人所躲固其宜也羿何罪歟

17 女媧有体 孰制匠之 3・15a
伝言女媧人頭蛇身一日七十化

列仙伝

18 鼇戴山抃 何以安之 3・13b

列仙伝曰有巨霊之鼇背負蓬萊之山而抃舞戯滄海之中

呂氏春秋

19　見有娀之佚女　1・25b

呂氏春秋曰有娀氏有美女為之高台而飲食之（音初）

孝　経

20　惟庚寅吾以降　1・3b

降下也孝経曰故親生膝下（聖治）

周　官

21　奏大呂些　9・12a

大呂六律名也周官曰舞雲門奏大呂（大司楽）

22　定空桑只　10・5a

空桑瑟名也周官云古者絃空桑而為瑟

孟　子

23　離婁微睇兮　4・20a

離婁古明目者也孟子曰離婁之明（離婁上）

尚　書

24　忽吾行此流沙兮　1・35a

尚書曰余波入于流沙（禹貢）

25　奏九歌而舞韶兮　1・36a

韶九韶舜楽也尚書簫韶九成是也（皐陶謨）

26　戒六神与嚮服　4・2a

六神謂六宗之神也尚書禋於六宗（舜典）

27　待明君其知之　4・3a

須賢明之君則知己之忠也書曰知人則哲（皐陶謨）

28　指嶓冢之西隈兮　4・24a

嶓冢山名尚書嶓冢導漾（禹貢）

29　暨志介而不忘　4・31a

暨与也尚書曰讓于稷契暨皐陶（舜典）

30　隱岐山以清江　4・34b

岐山江所出也尚書曰岐山導江（禹貢）

31　流沙千里些　9・3b

流沙沙流而行也尚書曰余波入於流沙（禹貢）

32　蘭芳仮些　9・13b

仮至也書曰仮于上下（堯典）

33　南有炎千里　10・2a

炎火盛貌尚書曰火曰炎上（洪範）

34　弱水汨其為難兮　14・2b

尚書曰道弱水至於合黎也（禹貢）

35　路蕩蕩其無人兮　16・6b

蕩蕩平易貌也尚書曰王道蕩蕩（洪範）

36　三苗之徒以放逐兮　16・21b

三苗堯之佞臣也尚書曰竄三苗於三危（舜典）

37　讒人譏譏　16・24a

譏譏讒言貌也尚書曰譏譏靖言（秦誓）

38　容与漢渚　16・27a

漢水名也尚書曰嶓冢導漾東流為漢（禹貢）

39　汝筮予之　9・2a

筮卜問也蓍曰筮尚書曰決之蓍亀

尚書序

40　五子用失乎家巷　1・17a

尚書序曰太康失国昆弟五人須于洛汭作五子之歌此佚篇也（五子之歌序）

41　説操築於傅巌兮　武丁用而不疑　1・29b

書序曰高宗夢得説使百工営求諸野得諸傅巌作説命是佚篇也（説命序）

易

42　余固知謇謇之為患兮　1・7b

謇謇忠貞貌也易曰王臣謇謇匪躬之故（蹇六二）

43　芳与沢其雑糅兮　1・14a

芳徳之臭也易曰其臭如蘭（繫辞上・六章）

44　循繩墨而不頗　1・18a

頗傾也……易曰無平不頗也（泰九三）

45　国無人莫我知兮　1・37a

無人謂無賢人也易曰闃其戸閒其無人（豊上六・象）

46　蕙肴蒸兮蘭藉　2・2b

藉所以藉飯食也易曰藉用白茅也（大過初六・象）

47　竜駕兮帝服　2・4b

竜駕言雲神駕竜也故易曰雲従竜（乾・文言）

48　去君之恒幹　9・2a

幹体也易曰貞者事之幹（乾・文言）

49　悲太山之為隍兮　13・17a

隍城下池也易曰城復于隍也（泰上六・象）

50　同音者相和兮　同類者相似　13・19b

易曰方以類聚物以群分（繫辞上・一章）

51　辞霊脩而隕志兮　16・2b

隕堕也易曰有隕自天（姤九五・象）

52　狐雌吟於高墉兮　16・8b

墉牆也易曰射隼于高墉之上（解上六・象）

53　情素潔於紐帛　16・9a

紐結束也易曰束帛戔戔（賁六五）

河図括地象

54　遵吾道夫崑崙兮1・33b

河図括地象言崑崙在西北其高万一千里上有瓊玉之樹也

55　何所不死　3・8b

括地象曰有不死之国

帝　繫（雷学淇『世本考証』によれば世本の篇名である）

56　帝高陽之苗裔兮　1・3a

高陽顓頊有天下之号也帝繫曰顓頊娶于騰隍氏女而生老僮

57　曰鯀婞直以亡身兮　1・15a

帝繫曰顓頊後五世而生鯀

58　就重華而陳詞　1・16b

帝繫曰瞽叟生重華是為帝舜

59　恐高辛之先我　1・26b

帝繫曰高辛氏為帝嚳帝嚳次妃有娀氏女生契

春　秋

60　長人何守　3・8b

長人長狄春秋云防風氏也禹会諸侯防風氏後至于是使守封嵎之山也（国語・魯語下）

春秋考異郵

61　造旬始而観清都　5・6b

旬始皇天名也一云旬始星名春秋考異郵曰太白名旬始如雄鶏也

相玉書

62　豈珵美之能当　1・28b

相玉書言珵大六寸其耀自照

禹大伝

63　朝濯髪乎洧盤　1・25a

禹大伝曰洧盤之水出崦嵫之山

淮南子

64　夕余至乎県圃　1・20b

淮南子曰崑崙県圃維絶乃通天（地形）

65　総余轡乎扶桑　1・21b

淮南子曰日出湯谷浴乎咸池拂于扶桑（天文）

66　朝吾将済於白水兮　1・23b

淮南子言白水出崑崙之山飲之不死（地形、今本作丹水）

67　夕帰次於窮石兮　1・24b

淮南子言弱水出於窮石入於流沙也（地形）

68　康回馮怒　地何故以東南傾　3・6a

康回共工名也淮南子言共工与顓頊争為帝不得怒而触不周之山天維絶地柱折故東南傾也（天文）

69　増城九重　其高幾里　3・6b

淮南言崑崙之山九重其高万二千里也（地形）

70　羿焉彃日　烏焉解羽　3・9b

淮南言堯時十日並出草木焦枯堯命羿仰射十日中其九日日中九烏皆死堕其羽翼故留其一日也（本経）

71　涉丹水而馳騁兮　11・2b

丹水猶赤水也淮南言赤水出崑崙也（地形）

72　高陽無故而委塵兮　13・8b

高陽帝顓頊也……淮南子曰顓頊与共工争為帝（天文）

73　采鍾山之玉英　14・2a

淮南言鍾山之玉焼之三日其色不変（俶真）

74　囚霊玄於虞淵　16・29b

淮南言日出湯谷入于虞淵（天文）

陵陽子明経

75　漱正陽而含朝霞　5・4a

陵陽子明経言春食朝霞朝霞者日始欲出赤黄気也秋食淪陰淪陰者日没以後赤黄気也冬飲沆瀣沆瀣者北方夜半気也夏食正陽正陽者南方日中気也并天地玄黄之気是為六気也

爾雅

76　夕始臨乎於微閭　5・6b

爾雅曰東方之美者有醫無閭之珣玗琪焉（釈地）

77　実満宮些　9・7b

宮猶室也爾雅曰宮謂之室（釈宮）

78　王虺騫只　10・2b

王虺大蛇也爾雅曰蟒王蛇也（釈魚）

79　将去烝兮遠遊　15・4b

爾雅曰林烝君也（釈詁）

論語

80　恐脩名之不立　1・9b

論語曰君子疾没世而名不称焉（衛霊公）

81　惟澆在戸　3・14a

澆古多力者也論曰澆盪舟（憲問）

82　矯弋機而在上兮　4・6b

弋亦射也論語曰弋不射宿（述而）

83　苟余心其端直兮　雖僻遠之何傷　4・9a

言我惟行正直之心雖在遠僻之域猶有善称無害疾也故論語曰子欲居九夷也（子罕）

84　魂兮帰来　東方不可以託些　9・2b

託寄也論語曰可以託六尺之孤（泰伯）

85　志憾恨而不逞兮　14・1b

憾亦恨也論語曰与朋友共弊之而無憾（公冶長）

86　蓍蔡兮踊躍　15・2b

蔡大亀也論語曰臧文仲居蔡（公冶長）

87　諒皇直之屈原　16・2a

諒信也論語曰君子貞而不諒（衛霊公）

88　秉干将以割肉　16・10b

論語曰割雞焉用牛刀（陽貨）

89　筐沢瀉以豹鞹兮　16・10b

鞹革也論語曰虎豹之鞹（顔淵）

90　綴鬼谷於北辰　16・29a

北辰北極星也論語曰譬如北辰居其所而衆星拱之（為政）

91　惟夫党人之偸樂兮　1・7a

党朋也論語曰朋而不党

II　『楚辞章句』引詩表

92　子慕予兮善窈窕　2・20a

窈窕好貌詩曰窈窕淑女（周南・関雎）

93　憂心展転　16・17b

展転不寤貌詩云展転反側（周南・関雎）

94　躬劬労而瘠悴　16・25a

瘠病也詩云我馬瘠矣（周南・巻耳）

95　葛藟纍於桂樹兮　16・19b

藟葛荒也藟縁也詩曰葛藟纍之（周南・樛木）

96　呉酸蒿蔞　10・4a

蔞香草也詩曰言采其蔞也（周南・漢広）

97　登大墳以遠望兮　4・13a

水中高者為墳詩曰遵彼汝墳（周南・汝墳）

98　羨余術兮可夷　15・10b

詩云既見君子我心則夷夷喜也（召南・草虫）

99　甘棠枯於豊草兮　16・26a

甘棠杜也詩云蔽芾甘棠（召南・甘棠）

100　霧宵晦以紛紛　16・14a

宵夜也詩云肅肅宵征（召南・小星）

101　夜耿耿而不寐兮　5・1b

耿耿猶儆儆不寐貌也詩云耿耿不寐（邶風・柏舟）

102　孰能思而不隠兮　4・33b

隠憂也詩曰如有隠憂（邶風・柏舟）

103　何予生之不遭時　14・1b

遭遇也詩云遭閔既多（邶風・柏舟）

104　延佇乎吾将反　1・13a

佇立貌詩曰佇立以泣（邶風・燕燕）

105　結桂枝兮延竚　2・13b
竚立也詩曰竚立以泣（邶風・燕燕）
106　径淫噎而道壅　16・3a
淫噎闇昧也詩云不日有噎（邶風・終風）
107　順凱風以従遊兮　5・4b
南風曰凱風詩曰凱風自南（邶風・凱風）
108　時遅遅其日進　16・16b
遅遅行貌詩云行道遅遅（邶風・谷風、小雅・采薇）
109　執組者不能制兮　16・6b
執組猶織組也織組者動之於此而成文於彼善御者亦動之於手而尽馬力也詩云執轡如組（邶風・簡兮、鄭風・大叔于田）
110　志隱隱而鬱怫兮　16・11b
隱隱憂也詩云憂心隱隱（邶風・北門）
111　江湘油油　16・17b
油油流貌也詩云河水油油（衛風・碩人）
112　泣下漣漣　16・20a
漣漣流貌也詩云泣涕漣漣（衛風・氓）
113　魂中道而無杭　4・4b
杭度也詩曰一葦杭之（衛風・河広）
114　登嶱屹以長企兮　望南郢而闕之　16・18b
企立貌詩云企予望之（衛風・河広）
115　願皓日之顯行兮　8・11b
日以喩君詩云杲杲出日（衛風・伯兮）
116　望瑤台之偃蹇兮　1・25b
石次玉曰瑤詩曰報之以瓊瑤（衛風・木瓜）
117　瑤席兮玉瓆　2・2b
瑤石之次玉者詩云報之以瓊瑤（衛風・木瓜）
118　山中檻檻　16・11a
檻檻車声也詩云大車檻檻（王風・大車）
119　璆鏘鳴兮琳琅　2・2b
鏘佩声也詩曰佩玉鏘鏘（鄭風・有女同車）
120　西施媞媞而不得見兮　13・9a
媞媞好貌也詩曰好人媞媞也（魏風・葛屨）
121　願託志乎素餐　8・10a
詩云彼君子兮不素餐兮謂居位食禄無有功徳名曰素餐也（魏風・伐檀）
122　懷椒聊之蕚蕚兮　16・24a
椒聊香草也詩曰椒聊且（唐風・椒聊）
123　薜荔柏兮蕙綢　2・6a
綢縛束也詩曰綢繆束楚是也（唐風・綢繆）
124　左袪挂於榑桑　14・3b
袪袖也詩云羔裘豹袪（唐風・羔裘）
125　乘竜兮轔轔　2・13b
轔轔車声詩云有車轔轔也（秦風・車鄰）
126　曽不知夏之為丘兮　4・13a
夏大殿也……詩云於我乎夏屋渠渠（秦風・権輿）
127　冬有突廈　9・6a
廈大屋也詩云於我乎夏屋渠渠（秦風・権輿）
128　怨靈脩之浩蕩兮　1・11b
浩猶浩浩蕩蕩無思慮貌也詩曰子之蕩兮（陳風・宛丘）

129 披華裳兮芳芬　15・5b
徐曳文衣動馨香也詩曰婆娑其下（陳風・東門之枌）
130 齊朝誶而夕替　1・11b
誶諫也詩曰誶予不顧（陳風・墓門）
131 聊逍遙兮容与　2・8b
逍遙遊戲也詩曰狐裘逍遙（檜風・羔裘）
132 紛旖旎乎都房　8・6a
旖旎盛貌詩云旖旎其華（檜風・隰有萇楚）
133 結桂樹之旖旎兮　16・15b
旖旎盛貌詩云旖旎其華（檜風・隰有萇楚）
134 東風飄兮神霊雨　2・21a
飄風貌詩曰匪風飄兮（檜風・匪風）
135 爨土鬻於中宇　16・20a
鬻釜也詩云溉之釜鬻（檜風・匪風）
136 情慨慨而長懐兮　16・12a
慨慨歎貌也詩云慨我寤歎（曹風・下泉）
137 微霜降之蒙蒙　13・14a
蒙蒙盛貌詩云零雨其蒙（豳風・東山）
138 孔静幽默　4・19a
孔甚也詩曰亦孔之将（豳風・破斧、小雅・正月）
139 鹿鳴求其友　13・19b
詩曰……又曰呦呦鹿鳴食野之苹（小雅・鹿鳴）
140 願仮簧以舒憂兮　16・19a
笙中有舌曰簧詩云吹笙鼓簧（小雅・鹿鳴）
141 往来侁侁些　9・4b
侁侁往来声也詩曰侁侁征夫（小雅・皇皇者華）
142 飛鳥号其群兮　13・19b
詩曰嚶其鳴矣求其友声（小雅・伐木）
143 猷歲発春兮　汨吾南征　菉蘋斉葉兮　白芷生　9・19a
言屈原放時菉蘋之草其葉適斉白芷萌芽方始欲生拠時所見自傷哀也猶詩云昔我往矣楊柳依依（小雅・采薇）
144 訊九魁与六神　16・12a
訊問也詩云執訊獲醜（小雅・出車、小雅・采芑）
145 吸湛露之浮源兮　4・34b
湛厚也詩曰湛湛露斯（小雅・湛露）
146 晞女髪兮陽之阿　2・15b
晞乾也詩曰匪陽不晞（小雅・湛露）
147 浟楊舟於会稽兮　16・29b
楊木名也詩云汎汎楊舟（小雅・菁菁者莪、小雅・采菽）
148 夷蠢蠢之溷濁　16・15a
蠢蠢無礼義貌也詩云蠢爾蛮荆（小雅・采芑）
149 覧芷圃之蠢蠢　16・15b
圃野樹也詩云東有圃草（小雅・車攻）
150 躬劬労而瘠悴　16・25a
劬亦労也詩云劬労於野（小雅・鴻鴈）
151 歩余馬於蘭皐兮　1・13b
沢曲曰皐詩云鶴鳴于九皐（小雅・鶴鳴）
152 霾両輪兮縶四馬　2・22b
縶絆也詩曰縶之維之（小雅・白駒）
153 夫何煢独而不予聴　1・16a

煢孤也詩曰哀此煢独（小雅・正月）

154　耀霊曄而西征　5・3b

霊曄電貌詩云曄曄震電（小雅・十月之交）

155　娛酒不廃　9・13a

或曰娛酒不発発旦也詩云明発不寐（小雅・小宛）

156　仮寐兮愍斯　15・3a

不脱冠帯而臥曰仮寐詩云仮寐永歎（小雅・小弁）

157　蜮傷躬只　10・2b

蜮短狐也詩云為鬼為蜮（小雅・何人斯）

158　何周道之平易兮　13・8b

詩曰周道如砥其直如矢（小雅・大東）

159　征夫労於周行兮　16・9a

行道也詩云苕苕公子行彼周道（小雅・大東）

160　孰契契而委棟兮　16・17a

契契憂貌也詩云契契寤歎（小雅・大東）

161　立長庚以継日　16・29a

長庚星名也詩云西有長庚（小雅・大東）

162　魂眷眷而独逝　16・8a

眷眷顧貌詩云眷眷懐顧（小雅・小明）

163　蓑蒺蒺以盈室兮　1・15b

蓑蒺蒺也……詩曰楚楚者蓑（小雅・楚茨）

164　爨土鬻於中宇　16・20a

爨炊竈也詩云執爨踖踖（小雅・楚茨）

165　播江離与滋菊兮　4・7a

播種也詩曰播厥百穀（小雅・大田、周頌・噫嘻、載芟、良耜）

166　以娛昔只　10・6b

昔夜也詩云楽酒今昔（小雅・頍弁）

167　若青蠅之偽質兮　16・9b

青蠅変白使黒変黒成白以喩讒佞詩云営営青蠅（小雅・青蠅）

168　菀彼青青　16・20b

菀盛貌也詩云有菀者柳（小雅・菀柳）

169　蓑蒺蒺以盈室兮　1・15b

蒺王芻也……詩曰……又曰終朝采蒺（小雅・采緑）

170　雑鶩鶬只　10・7b

鶩鶬鶩也詩云有鶩在梁（小雅・白華）

171　時亶亶而過中兮　8・3a

亶亶進貌詩云亶亶文王（大雅・文王）

172　蒼鳥群飛　3・19a

言武王伐紂将帥勇猛如鷹鳥群飛……詩曰惟師尚父時惟鷹揚也（大雅・文明）

173　忽奔走以先後兮　1・7b

奔走先後四輔之職也詩曰予聿有奔走予聿有先後是之謂也（大雅・緜）

174　沼水深兮　16・27a

沼池也詩云王在霊沼（大雅・霊台）

175　朦瞍謂之不章　4・19b

朦盲者也詩云朦瞍奏公（大雅・霊台）

176　及前王之踵武　1・7a

武跡也詩曰履帝武敏歆（大雅・生民）

177　投之於冰上　鳥何燠之　3・22a

言姜嫄以后稷無父而生弃之於冰上有鳥以翼覆薦之以為神乃取而養之詩曰誕寘之寒冰鳥覆翼之（大雅・生民）

178　失塵莚些　9・6b

筵席也詩云肆莚設机（大雅・行葦）

179　吾将以為類兮　4・22b

類法也詩云永錫爾類（大雅・既酔）

180　精瓊靡以為粻　1・33b

粻糧也詩云乃裹餱糧（大雅・公劉）

181　讒夫譎譎而漫著兮　16・3a

譎譎盛多貌也詩云譎譎王多吉士（大雅・卷阿）

182　服覚皓以殊俗兮　16・27b

覚較也詩云有覚德行（大雅・抑）

183　偃王行其仁義兮　荊文寤而徐亡　13・4a

徐偃王国名也周宣王之舅申伯所封也詩曰申伯番番既入于徐（大雅・崧高）

184　麗而不奇些　9・11a

不奇奇也猶詩云不顯文王不顯顯也（周頌・維天之命）

185　欲酌醴以娛憂兮　16・14a

醴醴酒也詩云為酒為醴（周頌・豊年、載芟）

186　朕皇考曰伯庸　1・3b

父死称考詩曰既右烈考（周頌・雝）

187　耘蘩蘅与蘘荷　16・23b

耘耔也詩云千耦其耘（周頌・載芟）

188　田邑千畛　10・8b

畛田上道也……詩云徂隰徂畛（周頌・載芟）

189　見有娀之佚女　1・25b

詩曰有娀方将帝立子生商（商頌・長発）

190　固煩言不可結詒兮　4・4a

詒遺也詩曰詒我徳音也

191　砥室翠翹　9・6b

砥石名也詩曰其平如砥

注

(1) 輯録の対象は四部備要本『楚辞補注』の巻一から巻十六までの王逸の注釈として、巻十七「九思」の注釈は含めない。「九思」の注が王逸によるものではあり得ないことが、顧炎武『日知録』巻二七・楚辞注において指摘されているからである。
また四部備要本と『文選』李善注に引かれた王逸注とを校勘すると、引用書についても異同が見られる。しかしながら本論文では『楚辞章句』を全体的に考察するため、この問題は取上げないこととした。

(2) これは実は『春秋』経ではない。引書表㊿参照。

(3) 丸で囲んだ数字は『楚辞章句』引書表の通し番号である。以下、『楚辞章句』の注釈中の引用書の例の出所は、この通し番号で表示する。

(4) 本文と引用文との一致が2文字以上の場合でもD類と考え得る例が少なからず存在する。しかしそれらはB類、つまり表現のみを借用した典故表現とも見なし得るので一応除外した。

(5) 拙稿「王逸『楚辞章句』の注釈態度について」(「日本中国学会報」39) 参照。

(6) 拙稿「班固と王逸の屈原評価について」(「九州中国学会報」26) 参照。

(7) 拙稿「王逸『楚辞章句』の注釈態度について」(「日本中国学会報」39) 参照。

〔平成元年十月十八日　原稿受付〕